

日本書紀第十六

武烈天皇

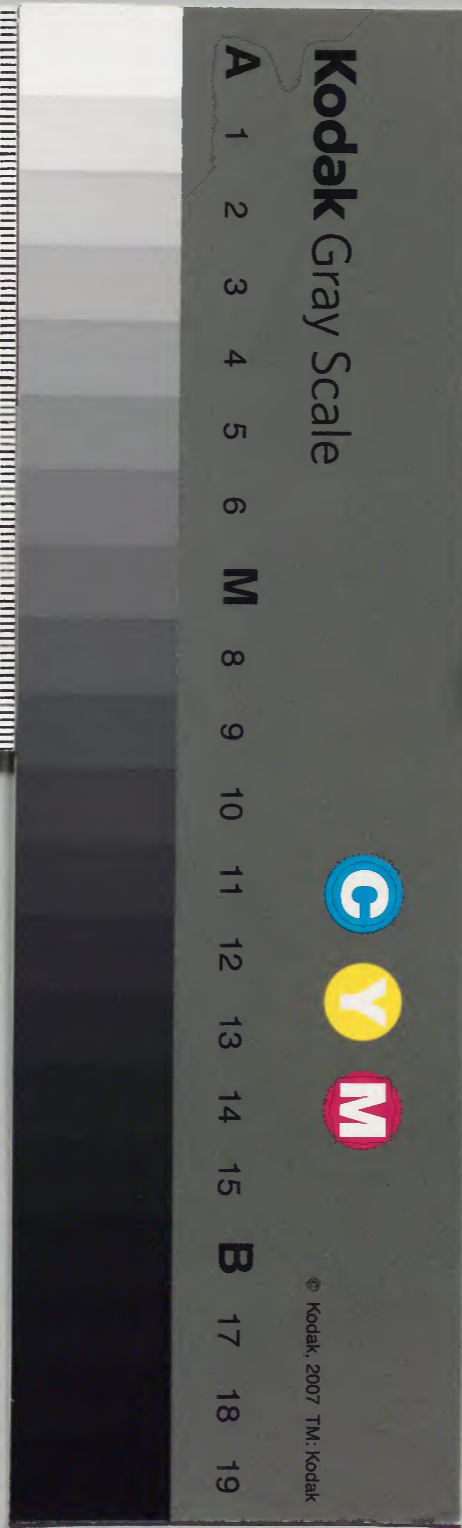
十五

逸

太政官文庫			
和書門	特別	三〇九九號	函架
類	三	冊	架
類	函	架	冊

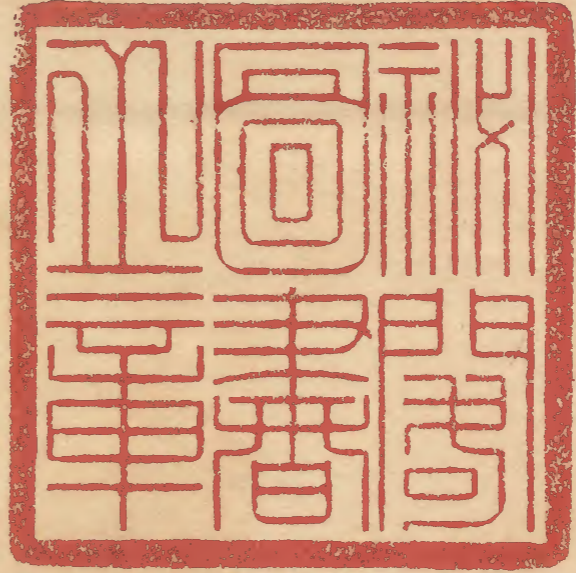
內閣文庫	
番號	和 32099
冊數	32 ( 18 )
函號	特 55 12

共廿二





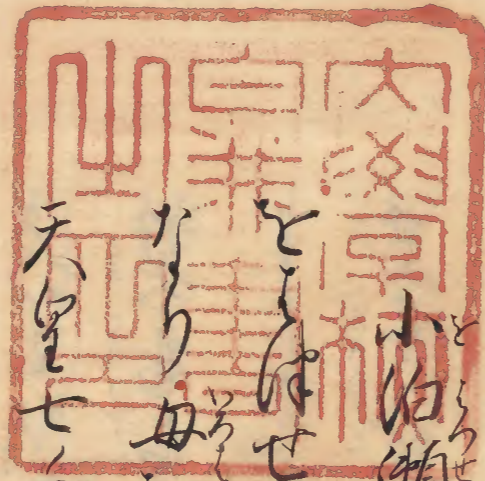
日本書紀卷之十五



日本書紀卷第十六

小泊瀬雅鶴天皇

武烈天皇



とてはせむらひもされ天皇ハ億計天皇に  
おけのすゝみとてつひに  
おけの

たりては...のりつる...  
刑 理

分明...  
晏 朝

...  
獄 斬

りゆくの悪とすし給て一も音とてたまめ  
給ふはおとせも詔く此酷刑とてつらんを  
まふとていふと所しは肉のおりんたう  
ししくりてふかあひあづ十一日八月億計  
天皇のんさりますおはあまらうと平群  
真鳥信忠よはれまうりこもとり檀いも  
しして日本よまぬあうんとあひてあつ  
てる子乃管氏らりあつてはれらあづ  
とあり事よふれたうりあふたりて  
居 邪

て信乃言う一こにさ子のぬれあ鹿鹿  
心の大けしれじとあ新媛とあさんとあ  
してあふらと海とてけいあう宅よ  
停でまうてあんとあうとああ  
ひめいんさきよあふれたまらうとあ男頼り  
おはれぬを子乃ちざり給ふよたぐらうと  
おとまてりりも中て海とてやいと  
かゝるまはけしとららちまらうとあま  
つらんあふりてさみらざり一処よ停  
海柘榴市 望

てほさんやおもひりてらつくほくまらるる縁  
り紙して平群乃大まらうらうら此宅より  
めてち子れおほんとけりとのづつ津の宮  
こいりてむすまらうらなまきこたにりたし  
りあてまらりてまらうらくほくま馬む誰がた  
めりうらんみまらりのまらにとひて久  
うたてまらうらとちみへ路乃ららにお  
かりあひてみおひてよらうら一はら  
してらうらうらあよらうらうらうら  
奇持

むとちうに立してげむめが神とて  
ふめらうらせり志織  
てちみへげひめとれ中とを排  
あくり是ふそち子げむめが神と  
始て向前よりけきまらうてあは緒  
あくあくあくあくあくあく  
あがせのあゆりてあはあはあはあは  
うらうらうらうらうらうらうら  
一本あはあはあはあはあはあは

鞠<sup>い</sup>人<sup>い</sup>し<sup>い</sup>し<sup>い</sup>し<sup>い</sup>し<sup>い</sup>

そよめいれあし<sup>い</sup>か<sup>い</sup>さ<sup>い</sup>の<sup>い</sup>あ<sup>い</sup>せ<sup>い</sup>を<sup>い</sup>み<sup>い</sup>

そ子<sup>い</sup>奇<sup>い</sup>ま<sup>い</sup>せ<sup>い</sup>れ<sup>い</sup>あ<sup>い</sup>し<sup>い</sup>

おほ<sup>い</sup>ら<sup>い</sup>と<sup>い</sup>あ<sup>い</sup>れ<sup>い</sup>ま<sup>い</sup>さ<sup>い</sup>だ<sup>い</sup>ら<sup>い</sup>て<sup>い</sup>あ<sup>い</sup>し<sup>い</sup>

おほ<sup>い</sup>ら<sup>い</sup>と<sup>い</sup>あ<sup>い</sup>れ<sup>い</sup>ま<sup>い</sup>さ<sup>い</sup>だ<sup>い</sup>ら<sup>い</sup>て<sup>い</sup>あ<sup>い</sup>し<sup>い</sup>

おほ<sup>い</sup>ら<sup>い</sup>と<sup>い</sup>あ<sup>い</sup>れ<sup>い</sup>ま<sup>い</sup>さ<sup>い</sup>だ<sup>い</sup>ら<sup>い</sup>て<sup>い</sup>あ<sup>い</sup>し<sup>い</sup>

おほ<sup>い</sup>ら<sup>い</sup>と<sup>い</sup>あ<sup>い</sup>れ<sup>い</sup>ま<sup>い</sup>さ<sup>い</sup>だ<sup>い</sup>ら<sup>い</sup>て<sup>い</sup>あ<sup>い</sup>し<sup>い</sup>

おほ<sup>い</sup>ら<sup>い</sup>と<sup>い</sup>あ<sup>い</sup>れ<sup>い</sup>ま<sup>い</sup>さ<sup>い</sup>だ<sup>い</sup>ら<sup>い</sup>て<sup>い</sup>あ<sup>い</sup>し<sup>い</sup>

おほ<sup>い</sup>ら<sup>い</sup>と<sup>い</sup>あ<sup>い</sup>れ<sup>い</sup>ま<sup>い</sup>さ<sup>い</sup>だ<sup>い</sup>ら<sup>い</sup>て<sup>い</sup>あ<sup>い</sup>し<sup>い</sup>

おほ<sup>い</sup>ら<sup>い</sup>と<sup>い</sup>あ<sup>い</sup>れ<sup>い</sup>ま<sup>い</sup>さ<sup>い</sup>だ<sup>い</sup>ら<sup>い</sup>て<sup>い</sup>あ<sup>い</sup>し<sup>い</sup>

たふちやきいとしひおんりに

をみしめたとめしめぬしん籍ひんにけい新しん嫁け

とをらりやとくかきふかき父ちち子これれりりややささかかい

ちとさしりまはしておしし小こてりてて世よ夜よををややふふ

い大だい付つけ金かね村むら連れんのの宅たくよりよりそそままりりてて兵へいととははどどく

しりり流ながたた大だい付つけ連れんとと河かままりりれれいいききととああをを踏ふりり

あつとあつ籍しんははどどききよようう流ながりり一いち本ほん云ぐ籍しんけけ

ころころそそのの取とりりころころ時ときよよけけ嫁けららああららううのの想おもいい

りてこのあらうおのころとえててれれとと流ながりり

おらうと流ながりりおのころとえててわわららむむとと流ながりりああふふみ

たりは井いよよ飲のみととけけららりりてて云い

いそのころと流ながりりすすままささららもも流ながりり

あつはりあつすすままししものものううととああははななけけと

ささらら流ながりりかかととすすままししものものううととああははななけけと

ささららととすすままししものものううととああははななけけと

ああつつままりりももああららりりああははななけけと

けけももししけけひひちちああらられれ  
ささららにに新しん嫁けああららりりししものものううととああははななけけと





まらき事とていふに誠しき事かたの  
しき事とていふに誠しき事かたの  
ねをいふ事とていふに誠しき事かたの  
井井とていふに誠しき事かたの  
けしとていふに誠しき事かたの  
いふに誠しき事かたの  
おらん事とていふに誠しき事かたの  
し天皇家の事とていふに誠しき事かたの  
うらむ事とていふに誠しき事かたの

てまらき事とていふに誠しき事かたの  
まらき事とていふに誠しき事かたの  
いふに誠しき事かたの  
おらん事とていふに誠しき事かたの  
し天皇家の事とていふに誠しき事かたの  
うらむ事とていふに誠しき事かたの  
まらき事とていふに誠しき事かたの  
いふに誠しき事かたの  
おらん事とていふに誠しき事かたの  
し天皇家の事とていふに誠しき事かたの  
うらむ事とていふに誠しき事かたの  
まらき事とていふに誠しき事かたの  
いふに誠しき事かたの  
おらん事とていふに誠しき事かたの  
し天皇家の事とていふに誠しき事かたの  
うらむ事とていふに誠しき事かたの

ては誰を婦して福がくく階下あひいて盡  
祇よまうし一語をくおほさるるみとけり  
の二日午よてりせおたまたのくたを  
ふけたまふにさ子けりくふおせく多  
くしうとての勝乃きんれよかきておまら日  
日大伴金村のひししとていそ大連よき  
元年春三月乙のとけりし乃朝つらのえと  
らの日ま日乃娘よとて皇太后とて終ふ

いまし娘子の文  
つまひしうす

しをわつらのとけり

二年秋九月しめふんかろとてきて  
その胎れらるとえそれとて  
三年冬十月人の指甲とぬいていひ城あり  
しし十一月大伴室屋大連よみとけり  
て志かた國乃男下とたうて城の像  
水源のひししはくまふとて城上  
まうとこれ月百深の意多節卒ぬき田の  
丘上よありと

日自夜四月人のしらぬとぬえまの  
あよむらゝめて樹のりてはふりさの  
かりーむとがとて海してあけい  
あつまふ

百深の末多王あらう  
とそとさかいやうは人井は深て海王  
と武寧王と

百深新撰末多王あらう  
あつとそとさかいやうは人にとて

て武寧と武寧王と新麻王と  
乃子と武寧と末多王と  
混支やま武寧と新麻王と  
とて新麻王と武寧王と  
ととととて武寧王と  
じまれし武寧王と  
新の海中に武寧王と  
まれし武寧王と  
海と武寧王と



夏月百済王新我素とまじりてつる  
多てまじり<sup>別</sup>に表をてつりて備と  
くまはよあてまじりてつる麻那  
百済國主のや<sup>骨族</sup>にんてと故にし  
じで新我とまじりて見とにつる  
まじりては井よみりて法師素と  
これ倭素のあやまり  
八月二月女とてむとまじりて平  
板の上よとてむとまじりて

けりまやめ女の不降とみるはよ  
つるとはつるうたかきつるはめい  
宿婢とまじりてあひひつる  
この時よとんで池とかり苑とけりて  
て禽獸とてつるまじりて物と  
一馬と試てお入ると時つると風と  
も昔雨とつるまじりて衣とつる  
おんつるまじりてつる  
つるつる天下のつるまじりて

ませりおほはるふにん<sup>侏</sup>のつとをそとせ<sup>もまら</sup>  
 せん<sup>慢</sup>のさあめひん<sup>侏</sup>の<sup>僑</sup>あや<sup>侶</sup>の<sup>倭</sup>  
 ていつたさきとゆるじてあはしき<sup>倭</sup>  
 たりわきにー後<sup>ひら</sup>り日<sup>藤</sup>転つてゝ<sup>たか</sup>  
 人おほみ<sup>沈</sup>ゝお<sup>酒</sup>ほしてあ<sup>後</sup>ーさ<sup>紀</sup>  
 めいものとして<sup>後</sup>席<sup>紀</sup>あ<sup>後</sup>やあ<sup>紀</sup>  
 せ<sup>結</sup>後<sup>後</sup>の部とおひ冬十二月のえん  
 いの翔つられあいの日天皇列城<sup>うしろ</sup>文ようく  
 せま<sup>し</sup>

Handwritten Japanese text in cursive style (sōsho), likely a letter or document, spanning approximately 12 vertical columns on the right page.

